

# STILL ALIVE

Dada Ando

はじめに

映画「スタンド・バイ・ミー」は、主人公ゴードイが少年時代の思い出を回想するシーンから始まります。偶然耳にした噂話を頼りに、少年4人が行方不明の死体を探す旅に出るロードムービーです。自らの意思で行動し成し得たものは、たとえそれが「死体」であっても誰にも譲れない、奪われたくないという気持ちが、死体を横取りしようとした不良たちに必死に抵抗する少年たちの姿から感じられます。「成功」は自らつかみ、守らなければならない。そこには一夏の冒険を通し、彼らがたくましく成長する姿と、子供ならではの純情が描かれていました。もちろん友情や青春が映画の主だったテーマだと思います。またノスタルジーに思いを馳せる一方、成功した大人として現在を生きるために必要なことに気づかせてくれます。

この物語に登場する年上や大人たちはロクデナシばかりで、少年たちは彼らの目の敵にされてしまいます。家庭や町に居心地の悪さを感じながら生きている少年たちの葛藤は、誰しも共感できるところがあるでしょう。奮起して小さな町を出て大学に進み良い仕事につくのが成功の条件だった時代背景も感じられます。映画の中で少年たちは皆それぞれに悩みを抱えていました。現実世界で年を重ねるにつれて分かってきたことがあります。若さゆえに不安や悩みが多いのかと思っていましたが、それらは種類や内容が変わるだけで、年をとっても影のようにいつもピッタリとついてきます。決して消えてなくなることはありません。それを気にしていない時だけ、そこには何も存在しなくなります。大人になるにつれ、現実的な世界は広がっていきます。やがて常識や原理に抗えなくなります。残念ながら、少年たちのようなお互いに気持ちを曝け出し対話する素直な心や、辛い気持ちや境遇を誰かに打ち明ける勇気は、逆に薄れていくのかもしれない。時間によって引き離された友情と純粋さは戻らず、代わりに強かに生きるために必要な術に上書きされていきます。美しい思い出も苦しいトラウマも今を生きるのに必要な記憶なのかもしれません。

いつもと同じ通勤電車、変わらない職場、そして週末にはいつものお店で顔見知りと会う。お互いを知っていることの煩わしさや面倒くささに苛立つことも時にはありますが、心地よく感じます。私たちは大体同じような日常を繰り返して生きています。習慣が反復している状態を続けていると、考えなくても自然に行動ができるようになります。良い習慣であれば、良い結果をもたらす、また逆も然りです。たまには少年たちのように理想としない現実とうんざりし、新しい何かを求め旅に出ることも大切ではないでしょうか。住み慣れた町から外へ出るとそこには見慣れない景色が広がり、新しい何かがあります。将来どうしたいのか、何になりたいのか悩む。アイデンティティを見つけるための期間は、大人になる過程において誰もが一度は直面するでしょう。しかし、大人になるにつれ生活に忙しくなり、新しいことを学ぶための自分の時間

を作ることは難しくなっていきます。同じ環境、同じ生活サイクルで思考し生み出されるものは何も変わらない人生でしかありません。もし本当に変化を望むのであれば、周囲の環境を超越して大きく考えることが必要です。

コンプレックスや過去のトラウマも全てあってこそ今の自分があります。恥ずかしい過去を変えることはできませんが、捉え方次第で価値のある経験へと変えることができます。そしてその経験を点とし、結ぶことで理想の未来へ繋がっていくと信じています。また、新しいことを学ぶことで脳には新しい思考の接続が作られます。学びにより思考の接続が維持されることで、だんだんと理想の現実近づいていく気がします。アートが好きで今までたくさんの展覧会を美術館やギャラリーで見してきました。同じものは一つとしてなく、とても個性的でいつもワクワクします。アーティストの見たことのない斬新で新しい、自分では想像もつかないアイデアや表現が、私の思考にいつも刺激を与えてくれます。気がつけば、思い出を回想していた主人公ゴードゥーと同じような境遇となっていました。ここで自分の半生を一度、文章で綴ってみようと思い立ちました。このエッセイをこれから読んでくださる皆さま、どうもありがとうございます。文章を通じ、皆さまに何かしらの気づきや発見があれば幸いです。また、ご意見やご感想などコメントいただけると、とても励みになります。そして、もしもこの文章が書籍となり、より多くの方々にお届けできることになれば、これ以上ない喜びです。皆さまのご支援を賜りますよう、どうぞよろしく願いいたします。

## #1 アメリカ

アメリカのカルチャーに夢中だった10代の頃、休みの日になると、1人自転車で古着屋や雑貨屋を回るのが日課でした。そこには独特な柔軟剤の香りと共に、古き良きアメリカの空気が漂っていたことを、今でも鮮明に覚えています。LEVI'SやLeeのヴィンテージデニム、Championのカレッジスウェット、アメ車のナンバープレートからBarにあるようなネオンサイン、はたまた古いコーラの瓶まで、当時の自分にとってのお宝が、そのようなお店には所狭しとディスプレイされていました。「Boon」や「モノ・マガジン」などの雑誌から得た情報と知識をもとに、アルバイトで稼いだお金を手にお宝を探しに行くことが、何事にも変え難い至福の時間でした。

そんな有意義な時間を過ごしていたある日、「バードランド」という名のお店に偶然出会います。そのお店には、アメリカで買い付けてきたラルフ・ローレンやバナナ・リパブリックの洋服や香水、年代物のアロハシャツ、ベトナム戦争時代のZippoライターやレトロなブリキ看板、何故かスキー板までもが雑多に置かれていました。まるでアメリカの映画やドラマで見たことのある屋根裏部屋のような、何かが起こりそうでワクワクする特別な空間でした。

お店のオーナーの方は、自分の父親と同じくらいの年齢で、彼からとても多くのことを学びました。彼は私

の知っている大方の大人たちとは違い、好きなことを仕事にしている、楽しく自由に生きているように見えたのです。お店にはaiwaのテレビデオがあり、遊びに行くと彼はいつもアメリカ映画を見ていました。そして、私が興味を持った映画を親切にもダビングしてくれました。私の心のベストテン第1位から第3位はこんな映画でした。「アメリカン・グラフィティ」、「ブルース・ブラザーズ」、「クライ・ベイビー」。普段、日常生活で関わる大人は、親や親戚を除き先生という立場の人が多く、幼少期から習っていた絵の先生以外は、あまり馴染めていませんでした。むしろ大人たちに対して、不信感を持っていた時期であり、少なからず問題を起こしていた時期でもありました。

当時では珍しく、彼は携帯電話を持っていて、よく英語で国際通話をしていたことを覚えています。いつか彼のように英語で会話できるようになりたいと思いました。英語科目は苦手でしたが、洋画や洋楽は好きでした。英文法は当時の私にはよく理解できませんでしたが、英語ならではの自由な雰囲気や空気感がとてもかっこ良く感じました。アメリカへ行ってみたい気持ちが強くなるにつれ、お店に行く頻度も増え、彼が海外出張でお店を留守にしている間は、店番をしている彼の奥さんと映画を観ながら彼の帰りを待ちました。そして、ついに高校2年生の夏休みに、そんな憧れの彼とアメリカへ行く機会を得るのです。

## #2 お金と仕事

高校生の私がアメリカに行くには、それなりにまとまったお金が必要でした。雑貨屋の仕入れについて行くということもあり、1週間ほど滞在するためです。アルバイトはしていたものの、海外旅行に十分なお金の蓄えはもちろんなく、多少のお金を親に借りなければなりません。まだ16歳で未成年だった私は、例え十分なお金があったとしても、海外旅行へ行くには親の許可が必要です。むしろ親にとってはお金のことよりも、見ず知らずの人に子供を預けて、海外へ行かせても大丈夫かという心配の方が強かったはず。海外旅行へ行くような家族でもなかったし、どちらかという、日々堅実に生活している平凡な家庭でした。どのように親を説得したか、はっきりとは覚えていませんが、とにかく頭の中は、憧れていたアメリカへ行けるチャンスが突然やってきたことへの興奮でいっぱいだったと思います。必死に夢中で、なんとかどうかにか、例え死んでもアメリカへ行きたいという気持ちを伝えたと思います。

自分の欲求や目的を果たすために、アルバイトでお金を稼ぐことは、当時の私にとっては学業以上に大切でした。高校在学中の3年間で、新聞配達、動物園の売店、派遣スタッフ、焼き鳥屋で働く経験をすることができました。毎朝、新聞でテレビ欄やスポーツ欄をチェックできたのは、台風や雪などの悪天候の日でも、忘れずにポストに新聞を届けてくれる配達員さんのおかげだと気づきました。ありとあらゆる仕事に携わる人たちがいて、商品やサービスの対価を支払う、また受け取ることによって世の中が回っているという事実、若くして気づけたのは幸いでした。

動物園の売店でのアルバイトは、高校の先輩の紹介で始めました。友人を誘って一緒に働くことができたので、同年代の仲間が集うアットホームな雰囲気でした。お客さんも家族連れやカップルが多く、とても幸せそうで平和な空気が流れる心地よい職場です。フライドポテト、焼きそば、ラーメン、フランクフルト、ソフトクリーム、冬はおでんなどの担当場所があり、それぞれの持ち場を各スタッフが担当します。技術的に特に難しいことも必要なく、学校が休みの土日祝日の多くを、とても楽しく働かさせてもらいました。ある日、高校の先生が、偶然お客さんとして来たことがあります。その日の私の担当はソフトクリームでした。いつもより少し大きめのソフトクリームを、ばつが悪そうに先生に手渡すと、笑顔で受け取ってくれました。私の通う高校は原則アルバイト禁止でしたが、咎められることなく事なきを得ました。

派遣スタッフの仕事はいわゆる日雇いで、主に引越しやオフィスの内装のセットアップ、イベント会場の設営などの力仕事でした。普段の生活では聞き慣れない、先輩の発する強い言葉に気後れしながら、あくせく働きました。重いものを運ぶにもコツがあり、ただ闇雲に力を使えば良いわけではなく、荷物の持ち方や運び方を工夫したり、運搬距離・時間を短縮するなど極力、体に負担がかからないように考えることが重要でした。あまり楽しいと感じたことはなく、体を駆使する労働は、私には向いていないと思いました。学業そっちのけで、とにかくアルバイト中心の忙しい毎日でした。学費を払ってくれていた親には申し訳なく思う気持ちもありますが、この時の私にはとても大切な時間だったように思います。義務教育やお金を払って通う学校では学べない、お金を稼ぐ楽しさや厳しさをアルバイトで経験しました。自分の自由な時間を労働に変えることでお金を稼ぎ、そのお金を使うことで、好きなものを買ったり、好きな場所に行ったり、自由を手にすることに夢中になっていきました。その中でも高校1年生の中盤から3年間を通して、平日の夜に働いた焼き鳥屋での思い出が、今でもとても鮮明で強烈に心に焼き付いています。

### #3 焼き鳥屋

高校1年の夏休みのある日、家から少し離れた普段はあまり通らない道を自転車で通りすぎると、焼き鳥屋の前に並んだ赤い提灯が私の目を引きました。幼少期、家の近くににあった芝居小屋の入り口にも人目を引くたくさんの赤い提灯がぶら下がっていた光景が、不意に目に浮かびました。幼い頃、私はとにかく提灯が好きで、クリスマスツリーにも小さな提灯を飾り付けていたほどです。そんな赤提灯が並ぶ焼き鳥屋の入り口には、「学生アルバイト募集、時給900円」の手書きの文字と連絡先の電話番号が書かれた張り紙がありました。無性に気になりワクワクしながらも、その日はとりあえず家に帰りました。

気になってもすぐに忘れてしまうこともたくさんありますが、あのアルバイト募集の張り紙はずっと頭の片隅にあり、なぜだか呼ばれている気がしました。それから毎日、用もないのに昼間や夕方、お店の前を何度も通って中の様子を伺うと、どうやら午後3時くらいから店内の明かりが灯っており、お店に誰がいることが判明します。電話をかけて話を聞くより、直接お店に行くべきだと直感的に思い、数日後には1人で訪ねることを決心しました。

夏の夕日に背中を押されて、恐る恐る引き戸を「ガラガラッ」と開けると、オレンジがかった暖かい電球色の、それほど広くない店内で、店主が1人で仕込みをしているところでした。自分の父親と同世代か少し歳がいった感じのする店主は、見た目は少し痩せ型で、電球の光が反射する縁なしのメガネからのぞく優しい瞳が印象的です。「すみません」と小声で店主に話しかけ、アルバイトに興味があることを話すまでのほんの数秒間、瞬間的に時間が止まりました。数々の見慣れない酒瓶、筆文字で商品名が書いてある木札、柱に付いている古い花瓶、ビニール製の小さな座布団が付いた背もたれのないカウンターの椅子など、いろいろな物が瞬時に目に入ってきました。何かが「ここだよ」と囁いたことを、映画のワンシーンのように今でも鮮明に覚えています。

初めて目にした店内の印象強い光景とは異なり、初対面の店主との会話はあまりはっきりと覚えていません。残念ながら込み入った話はできませんでした。店主も私が本気でアルバイトをしたいのか半信半疑だったのかもしれませんが。その場でのアルバイト採用の可否はなく、まずは親に了承を得てから、親と一緒に面接に来なさいとのことでした。お店の近くには市立の大学があり、私のように店先の張り紙を目にした学生が何人か働いていました。ただ、学生といっても大学生ばかりで、高校生は今まで1人もいません。15歳の私にとっては、自分の意思や想いだけではどうにもならないこともあるとは思いつつ、「高校生は無理です」と言われなかったことに少し安堵しました。しかし、私の両親はお酒を飲まない人だったので、焼き鳥屋には馴染みがなく、まさか自分の子どもが夜にお酒を提供するお店で働きたいと思うとは、想像もしていなかったと思います。そんな親を説得するのは容易いことではなかったのですが、なりふり構わず必死に説得しました。今考えると、わざわざ親を説得して一緒に面接に行かなくても、簡単に始められるアルバイトはいくらでもあったと思います。でも赤提灯の並んだそのお店には、今まで自分が経験したことのない何かがあるような気がして、どうしてもここで働きたいという強い気持ちがありました。母親に何度も反対されながらも諦めずに説得したことで、どうにか気持ちを理解してもらえました。そして母親と面接に行き、進路相談よりも長い面談の末、無事に店主にも本気で働きたい気持ちを理解してもらうことができました。こうして高校1年の2学期より、念願の焼き鳥屋で、平日の夜、週3日働けるようになったのです。

焼き鳥屋で働き始めてからしばらくして、家族が私に前置きなく食事に来たことがありました。どうやら私がちゃんと働いているのか、母親はずっと気になっていたようです。その時は動揺し、恥ずかしさのあまりそっけない態度をとってしまったと思います。内心はとても嬉しかったのですが、アルバイトが終わり帰宅してからも感謝の言葉を言えないままでした。今更ですが、どんな時でも私のことを深い部分で理解しようとしてくれた母親には心から感謝しています。

酒蔵の名前の入った前掛けをし、藍色のはっぴを着て、頭には縄のはちまきを締め、店主を大将もしくはマスターと呼び、大将の奥さんを女将さんと呼ぶ。普段の生活とは大きく異なる世界で、いざ働き始めてみると思いのほか大変でした。営業時間は18時から24時、その間を大将と女将さんとアルバイト2人の4人で切り盛りをする小さなお店でしたが、覚える仕事盛りだくさん。グループ客用の2つあるテーブル席が、奥から「1番さん」「2番さん」。柱に付いている古い花瓶がある席を「花瓶さん」、洗い場の近くの席は「アライさん」など、お客さんの席ごとに目印にちなんだ名前がありました。注文をとる際は、紙に鉛筆で、席の名前と注文の品と数を書きます。鉛筆を削るときはカッターナイフを使い、注文をとるときに使う紙は、古いカレンダーなどを八つ切りサイズほどに小さく切った、使い回しの紙でした。お会計の際は計算機を使い、現金のみの取り扱い。何から何までアナログな作業でした。

初めは自分でもびっくりするほど、仕事を覚えることができませんでした。焼き物によっては、大根おろしや刻みネギ、おろし生姜などの薬味の付け合わせがあり、焼き上がる前にお皿に添えて準備をするのですが、正しく覚えられずよく間違えて、大将に怒られていました。仕事に厳しい大将で、よくお尻を叩かれた記憶があります。たいして痛くはないのですが、人前でさらされると恥ずかしかったのを覚えています。また、トマトや厚揚げを切るなど、頻繁に包丁も使いました。家で母の料理を手伝うような料理男子ではなく、包丁を使う機会はほとんどなかったのに、よくもまあ使えるようになったなと思います。そのほかにも、タマネギや椎茸などの野菜類や、鶏のもも肉や軟骨、スズメなどを串に刺す、焼き物の仕込みも手伝いました。スズメの内蔵を取ると手が臭くなり、炭火で焼き上がった熱々のナスの皮を剥くと指先を軽く火傷します。お米は手の甲で水を測って炊き、洗い物もすべて手洗いで、初めは手がひどく荒れました。大変なことも多かったですが、仕事の後にお客さんが少なくなった静かなカウンターの隅で、大将の話を聞きながら食べたまかないは格別でした。仕事中は厳しい大将が、この時だけは優しい表情でした。

そんな大将が大事にしていたのがトイレです。チェーン店でオリジナル性が出しづらい店内で、唯一個性が出せたのがトイレでした。アーティスト草間彌生の作品「鏡の部屋」のように、無数の電球が鏡に反射するとても美しい空間で、壮大な宇宙を感じさせてくれます。片隅にはビートルズのメンバー4人の顔が写実的に描かれた、大将の絵が誇らしげに飾ってありました。細かく指示されることはありませんでしたが、お店が暇な時には、決まってトイレの鏡をピカピカに磨きました。過去から現在、そして未来へと続くような不思議な鏡の空間を磨いていると、タイムトラベルをしているように、さまざまな思いが頭をよぎります。大将の人生を俯瞰して見ているような感じです。学生運動が盛んな時期を早稲田大学で過ごした大将は、芸術や演劇が好きで役者になる夢がありました。俳優の西田敏行さんと同じ時期に劇団青年座で活動していたと話を聞いたことがありました。そのような過去から現在に至るまでの大将が生きてきた記憶が、トイレを掃除する度に、空想ではありますが、頭の中で少しずつ結び付いていくようでした。

また、お店の裏には6畳ほどの小さな事務所兼休憩スペースがあり、そこにはツーリングやバイクの写真が所狭しと貼ってありました。大将の息子さんは、鈴鹿8時間耐久ロードレースにも出場するバイクレースでした。大将もまた、赤いDUCATIに乗るほどのバイク好きで、休みの日にはよくツーリングに行っているようでした。大将にとって焼き鳥屋は、若い時に思い描いていたような夢の仕事ではなかったかもしれませんが、しかし、あるタイミングで自分の夢から離れ、のれん分けをしてもらえる焼き鳥屋で修行をして、自分

でお店を開きました。そして、子どもと共に追いかける新たな夢を見つけ、その夢を献身的にサポートしている大将の生き方には、夢と現実揺れる大人の葛藤があり、高校生ながらもいろいろと感ずるところがありました。そんな大将のおかげで、大人になることの意味や子を持つ親の気持ちが、自然と理解できたような気がします。

## #5 大人の世界

焼き鳥屋の開店は午後6時。その10分前に、お店の裏でいつもの格好に着替え、扉を開けてお店に入り「おはようございます！」と大きな声で大将に挨拶。おしぼりウォーマーを開け、少なくなったおしぼりを補充。お醤油や爪楊枝などが減っていないか各席を見て回り、必要があればこちらも補充。続いて大根を丸ごと1本おろす。これが結構な重労働。牛タンや牛ロース、鳥皮ポン酢や鳥しめじなどの、人気メニューに添える薬味となります。あとは生姜の皮をスプーンを使ってむいて、すりおろしたりもしました。外が徐々に暗くなるにつれて、提灯の赤い光が人目を引くようになっていきます。その前に一通りの下準備をしながら、お客さんを迎える準備を整えます。午後8時ごろ、時間が遅くなるにつれ、徐々にお店が賑やかになり、忙しさも増してきます。月末25日の給料日後の金曜日は格別に忙しく、また給料日前の雨の日の月曜日はとても暇でした。時間の感覚を忘れるくらい忙しいと、時計が早く動き、逆に何もやることがないくらい暇だと、時計はほとんど進みません。同じ時間でも過ぎる感覚に違いがあることを実感しました。大繁盛の日は大変でしたが、「大入」という1,000円札が入った赤い袋がもらえ、終わった後は充実感も得られました。しかし、暇なときは暇なときで、あのトイレの鏡を磨く時間が楽しみでした。

店先にぶら下がった赤い提灯を横目に、扉の前にあるのれんをくぐると、そこに広がっているのは高校生の私にとっては異世界。車のディーラー、美容師、学校の先生、キレイなモデル、サークルの大学生、いつも1人で来て本を読んでいる外国人、たまにチップをくれるお爺さん、母と娘、年の離れたカップル。お店には、普段の学校生活では出会うことのない大人たちがいました。繁華街ではなく落ち着いた場所にあるお店だったので、常連さんが多かったです。舌鼓を打ちながら、思い思いにお酒を飲んでいるお客さんたちの様子を仕事をしながら間近で見ていると、自ずと人間関係にも目が向きます。好意を寄せるパートナーや気の知れた仲間と飲めば、お酒は楽しいエネルギーをさらに加速させていることに気づきました。逆に部下が上司から説教されている席や会社の愚痴を言い合っている席など気が重いお酒は、負のエネルギーを助長し、否定的な考えや言動により、負のオーラが漂う虚しいお酒となっているようでした。

「お酒を飲むと本性が出る」と言われるように、お酒を飲むことで普段は見ることのできない、様々な感情が表に現れた大人の姿を目にしました。飲みすぎてトイレで吐いてしまう人もいれば、涙を流したり、寝てしまったりする人たちを見た高校生の私は、大人はなぜそこまでして飲むのかと正直疑問に思いました。その頃は高校生なりの思春期の悩みがありましたが、普段はしっかりした大人のそんな一面を見て、大人になっても悩みが尽きないんだと感じました。そんな中でも夜遅くまで楽しそうに話をしている大人たちの姿を見

て、大人になるのも悪くないなとも思いました。

社会に出ると誰もが皆、基本的には働く事になります。残念ながら、全ての人が自分の好きなことを仕事にできている訳ではないこともわかりました。自分の好きなことをしていそうな人は、明るく楽しそうな雰囲気や表情や仕草から感じられ、好きなことをしていなさそうな人は、不平不満や愚痴を言ったり横柄な態度から、どんよりした重たい雰囲気が感じられました。3年間の焼き鳥屋でのアルバイトを通し大人の世界の一部を先取りして知ることができたと思います。高校3年生の終わりの頃には焼き鳥屋にならないかと大将に声をかけてもらえるほど真剣に働き、また大将をはじめお客さんにもとても可愛がってもらいました。流石に高校卒業後18歳で焼き鳥屋になるうとは思いませんでしたが、どうせ働くなら自分が楽しめて人にも喜んでもらえる仕事をしたいと思いました。働くことでお客さんに喜んでもらいお金を稼ぎ、そのお金を使い自分の夢や目標のために使う。シンプルだけれど当たり前のことが、自立や成長につながっているように思います。学業とは違った学びが「大人の世界」にはありました。

## #6 夢の翼

高校2年の夏、通常よりも少し早めに夏休みをもらい、念願のアメリカへ行けることになりました。夏休みに入ってからだと、グッと航空券の値段が上がってしまうため、先生に早期休暇の相談をしたところ、意外にもあっけなく許可をもらうことができました。初めての海外旅行は、休みの日によく通っていた輸入雑貨屋(#1アメリカ参照)のオーナーの海外買い付けに同行させてもらえる、願ってもない旅となったのです。当時の海外旅行の主流は、パッケージツアーと呼ばれる、航空券と宿泊先のホテルがセットになったものでした。割安ですがフライトの時間や乗り換え、ホテルのロケーションや延泊などのアレンジはできない、あまり融通がきかないものでした。また飛行機に搭乗する際、オンライン予約・チェックインが主流となった今ではすっかり聞き覚えのない言葉になりましたが、かつては搭乗時刻の72時間前までに電話で予約の再確認をする「リコンファーム」が必要でした。日系の航空会社以外を利用する、リーズナブルな個人旅行をする場合、英語が話せない日本人には、これが一番の難関だったかもしれません。そんな時代に、旅慣れた彼が、航空券やホテルの手配、リコンファームを行い、さらにはパスポートの書類申請までサポートしてくれました。彼のおかげで、憧れだったアメリカへの旅は、初めての海外旅行にも関わらず、パッケージツアーでは考えられない自由に満ちた内容で、安心とワクワクを兼ね備えていました。

インターネットが普及する少し前なので、スマートフォンのような便利なものはまだありませんでした。地図アプリでおすすめのレストランや美術館などの情報をリアルタイムで集めることはできません。初めての海外渡航先へは、スマホの代わりに「地球の歩き方」が当時の必需品でした。旅行前から地球の歩き方を熟読し、必要箇所にはマーカーや付箋を貼り、入念に旅行先の情報や地図を頭に入れます。旅行に行くときには、既に良い感じに使い込まれ、1年間使った学校のどの教科書よりすっかり手に馴染んでいました。親戚に借りたサムソナイトのスーツケースに、1週間ほどの着替えや荷物を入念にパッキングし、いよいよ出発の

日を迎えました。この旅行のために新調したSTUSSYのパスポートケースを首からぶら下げ、ポケットに「写ルンです」を入れ、靴下の内側には前もって両替したドル札を忍ばせます。また、今では見かけなくなったトラベラーズチェックという、小切手のようなものも持っていきました。白く眩しい夏の朝日が車窓から差し込む中、父の運転する車で、幼い頃に飛行機の離着陸をよく見にいった空港へ。初めて飛行機に乗る私は、遠くから眺めていた飛行機に、やっと自分も乗れると思うと、すでに感無量でした。昔、友達の家で大人数で遊んでいた時、テレビゲームの順番がやっと自分に回ってきたときのような感覚です。小学校高学年まで、我が家にはテレビゲームが無かったので、その瞬間は格別に嬉しく、ワクワクするものでした。

空港で彼と待ち合わせ、親と軽く別れの挨拶をした後、まずは海外保険の加入手続き。その後、出国審査ゲートを無事に通りに抜けると、国際線の旅客ターミナルにたどり着きました。多くの人が行き交う空港で、初めて見るブランドショップや香水・化粧品が美しくディスプレイされている華やかな免税店は、もはや海外かと思うような雰囲気でした。香水の甘い香りに少しクラクラしながら、ユナイテッド航空の飛行機に搭乗。飛行機が離陸し、揺れながら徐々に高度が上がっていくにつれ、窓から見える街並みが、段々と小さくなっていきます。やがて、ミニチュア模型を上から眺めているような、普段では見慣れない景色に。上空から見ると、自分がとても小さな町に住んでいるように感じました。飛行機がしばらく上昇し気流も安定した頃に、機内サービスのアナウンスが日本語と英語でありました。初めて空の上で飲むコーラの美味しいこと！もうすぐ目にするのできる、アメリカの光景に思いを馳せながら、しばらく窓の外を眺めていました。

どこまでも果てしなく続きそうな太平洋。少しだけ湾曲していることが目視できる水平線を見ていると、地球の大きさや丸さを体感することができます。窓の外に広がる雲海と雲の隙間から、ときおり差し込む強い光が美しく、感動的でした。ドラゴンボールで孫悟空が、筋斗雲に乗っている時とおそらく同じような、高揚感とワクワクした気持ちが心の底から込み上げてきました。同時に、小学生の時に音楽室で聴いたドヴォルザークの「新世界から」が、オーケストラさながらの旋律で、感情高々に頭の中に満ち溢れています。初めての空の旅は、想像を遥かに超えた体験でした。重そうな飛行機が軽々と空を飛ぶ衝撃と、窓から実際に世界の広さを見た非日常的な感覚は、海外旅行に慣れてしまった今ではもう感じることはできない、大きな感動がありました。

## #7 ニューヨーク

ニューヨークのラガーディア空港に降り立った際、印象的だったのは日本との匂いの違いでした。シカゴでの飛行機の乗り継ぎでも既に感じていましたが、日本でよく通っていた古着屋や雑貨屋と同じような独特な柔軟剤の香りがしました。逆に言うと、それらのお店は、アメリカっぽい空気感を表現できていたんだと思います。そして、行き交う人々の体格や容姿が多様で、動作や行動に日本人のような均一性がなく、仕草も個性的。また、常に話声や何らかの音が耳に入ってきました。映画で見慣れた黄色いタクシーに乗り込みホ

テルに向かう途中、頻繁に聞こえるクラクションの音と、走行中の車体がガンガンと突き上がる強い振動に、穏やかではない空気を感じました。セントラルパークに近く、立地の良い、いかにもアメリカらしい古いホテルが、海外で初めての宿泊先でした。夏のニューヨークは、日本と同じくらい蒸し暑く快適ではありません。室内のエアコンの音が驚くほどうるさかったものの、そんな音も気にならないくらい毎日熟睡できました。早朝から夜遅くまで、輸入雑貨屋のオーナーと時間の許す限り動き回る、とても充実した楽しい日々でした。

1日の始まりは映画のシーンでよく見たダイナーでの朝食。カリカリによく焼けたベーコンと目玉焼き、その横に添えられたポテト、トーストとオレンジジュース。見た目よりもあっさりとした塩味で、脂っこくもなく美味しかったです。最高の朝食から楽しい1日がスタートします。暮盤の目のようになっているニューヨークの街は歩きやすく、南北に走っている通り「アベニュー」と、東西にのびる通り「ストリート」によって住所が分かります。ストリートの数字は、南側の数字が小さく、北に行くほど大きな数字。今回の買い付けの目的の1つであった、ナイキエアマックス95を探しながら、数え切れないほどのスニーカーショップを回りつつ、マンハッタンを歩いて南下していきます。残念ながらお目当ての黄色のエアマックスはありませんでしたが、他の色のものをいくつか見つけることができました。タイムズスクエアには、アミューズメントパークのようなトイザラスがあり、店内の巨大な観覧車が印象的でした。映画「ビッグ」でトム・ハンクスが、飛び跳ねながら足で演奏していた、巨大なピアノが有名なオモチャ屋のFAOシュワルツもまだ5番街にあり、大きな動物のぬいぐるみたちが出迎えてくれました。

買った物で両手と背中バックパックがいっぱいになると、タクシーか地下鉄で、荷物を置くために一旦ホテルに戻ります。地下鉄の改札を通る際に、まだメトロカードやOMNYが使われていなかった時代で、トークンと呼ばれる専用のコインが使用されていました。トークンブースという窓口でコインを購入するのですが、改札のすぐ近くでトークンをカチカチ鳴らしながら非公式に売っている人や、改札を颯爽に飛び越えてゆくキッズの姿が、いかにも当時のニューヨークといった感じでした。駅のホームでは、ダンスやライブをしているパフォーマーもよく見かけました。そのクオリティーの高さにも驚きますが、その横を走り回る、ウサギみたいに大きなネズミにも驚かされました。映画「ワイルドスタイル」に出てくるような落書きはされていませんでしたが、お世辞にも綺麗とは言えないのがニューヨークの地下鉄の車両です。オレンジと黄色のプラスチック製の座席でなければ、もっと暗く汚れた車内になっていたはずですが、ただ、日本の電車のような中吊り広告、つり革やドアのステッカー広告が無いので、とてもスッキリしています。当時の日本の中吊りは、週刊誌などの広告も多く、掲載されている言葉も過激かつ下品でした。グラビアアイドルなど、肌の露出が多く刺激の強い写真もあり、大人の通勤だけではなく、子どもの通学にも使われる公共の場においては、不適切なものが多かったように感じます。決して衛生的ではないものの一定の公序良俗が保たれているニューヨークの地下鉄を経験し、痴漢や性犯罪につながりかねない刺激の強い広告と「痴漢撲滅」の啓発ポスターが同居している日本の状況に矛盾を覚えました。

ニューヨークの地下鉄には、日本の駅構内に必ずある大切なあるものが見当たりません。そうトイレが一切ないのです。日本では外出先でトイレに行きたくなったら、真っ先に思いつくのがコンビニですが、ここではセブンイレブンやファミリーマートなどに代表されるコンビニは見当たりません。その代わりに通りを歩

いているときに探すのがデリ。手作りのサンドイッチやお惣菜、お菓子や飲み物、トイレトペーパーなどの日用品が揃う、日本のコンビニに負けず劣らずの便利なお店です。フランチャイズチェーンのコンビニとは違い、お店ごとに品揃えが異なる個性的な商店です。あとはカフェにもトイレはありますが、どちらもトイレを使用するには何かを購入し、鍵を借りる必要があります。防犯上だと思いますが、日本のようにサッと用を済ますことができないのです。いざ鍵を借りて入ってみると、故障中の張り紙がしてあることも多々あり、中々スムーズにいきません。ソーホーやロウアー・イースト・サイドのカフェでトイレを借りた時、落書きやステッカーの多さに驚きました。トイレの蓋を開けると、その裏にまでステッカーがびっしり。街中で見かける壁やビルボードのグラフィティは、ニューヨークっぽくかっこ良いのですが、トイレはなんだか落ち着かないので、シンプルで綺麗な日本の方が良いです。16歳にして、日本の生活では気づかなかった日本の良さや、逆に日本の異常さに気づく機会となりました。ニューヨークには多様性がありながらも、それゆえの秩序を守るためのルールがあった気がします。また、細かい事を気にしていたら生きていけない環境であり、自分の自由を主張する代わりに相手の自由も受け入れるような寛容な社会である反面、タフで強くないとここニューヨークでは生きていけないのだなあと、大きなネズミを思い出しながら考えるのでした。

## #8 ファッションとカルチャー

ニューヨークで楽しみにしていた1つが、フリーマーケット巡り。色々な場所で、毎週末に開催されている蚤の市です。入り口で1ドルの入場料を払い、駐車場のようなブロックの一角に足を踏み入れた途端、大好きな輸入雑貨屋 (#1 アメリカ 参照) に並んでいた多くのモノが、このような場所から来たことを悟りました。デニムやネルシャツなどの古着やUSEDのスニーカー、古い家具やレコード、インディアンジュエリーなどのアクセサリ、壊れかけのオモチャやぬいぐるみ、古いピンバッジや鍵、額縁や絵画まで、いかにもニューヨークらしい哀愁の漂うアイテムが、所狭しと並んでいます。しかし、多くのモノが雑然と置かれているせいか、その中から自分が気に入るモノは中々見つけ出せません。当時、日本で探していたヴィンテージのLEVI'Sなどはなく、古着もどこかイメージとは違い、野暮ったく見えます。ガラクタ的なモノが無数にある中、限られた時間の中でお宝を探し出すのは至難の業です。2時間ほど歩き回りましたが、結局このフリーマーケットでは何も買えませんでした。日本で足繁く通っていた、洗練された商品がずらりと並んだお店の垢抜けたセンスの良さを思い知りました。

アンディ・ウォーホールやバスキアが活躍していた狂乱の80年代が終焉し、しばらく経った90年代後半のニューヨークでは、ストリートカルチャーやサブカルチャーが台頭。背の高いオフィスビルが立ち並ぶビジネス街をヘッドホンをしてながらスケボーでプッシュするスーツ姿のビジネスマンから、Supremeの前にたむろするスタイリッシュなキッズたちまで、たくさんのスケーターを街中で見かけました。また、とても印象的だったのは、ヘアサロンを併設し最先端のクラブファッションを扱う、パトリシア・フィールドのような個性的なお店。赤や緑の奇抜なヘアスタイルで、耳や鼻にピアスが光るクールな店員さんと、そこに集うきらびやかなクラブバーたちからは、モードファッションとは異なる新しいカルチャーを感じました。そんなパトリシア・フィールドで、日本では当時まだ珍しかったW&LTの洋服や小物を買いました。また、ステー

ブ・マデンやバッファロー、ビビアン・ウエストウッドのロックンホースに代表されるような、厚底靴が世界中で流行っていた時代でした。残念ながら、現地のナイトライフを楽しむことは、年齢的にもできませんでしたが、お店に流れるヒップホップやハウスからニューヨークの夜の空気を少しだけ体感することができました。

古着やスニーカーなどのアメカジスタイル、オーバーサイズのダボついたTシャツやパンツが特徴的なスケータースタイルが、いわゆるストリートファッションと呼ばれていました。また、素材やカットにこだわったデザイナーズブランドやハイブランドを中心としたモードファッションなど、90年代は様々なファッションが輝いていた時代でした。数多くのファッション誌、カルチャー誌が、LIBROなどの大型書店やタワーレコード・HMVなどのCD/レコード店の書籍コーナーに陳列され、ファッション通信などのテレビメディアも東京、パリ、ニューヨーク、ミラノの最新コレクションを報じていました。まだインターネットやSNSがない時代は、その現場に行かないとコミュニティや人との出会いは生まれません。ファッション誌やカルチャー誌の影響力がとても強く、それらの情報により、トレンドや流行が少し遅れて地方にも拡散されていきます。東京では、原宿の裏通りにあった小さなお店に、行列が見られるようになります。A BATHING APEやUNDERCOVERに代表されるアメカジやパンク、グランジファッションなどのストリートファッションをベースにリブランディングされた、原宿発の新しいファッションブランドがいくつか誕生し、カリスマ的な人気を誇るようになりました。その後「裏原」という名の東京発のストリートファッションが、世界へ発信されていくようになります。

00年代に入ると、今では当たり前となったブランド同士のコラボレーションや、ダブルネームといった文化が、海外のラグジュアリーブランドにもインフルエンスし始めます。当時、ISSEY MIYAKEのクリエイティブディレクターだった滝沢直己が、2000 S/Sのメンズコレクションで、現代美術作家の村上隆の作品を起用しました。そして、2003年にはLouis Vuittonのアースティックディレクターだったマーク・ジェイコブスが、村上隆とのコラボレーションを開始します。カラフルなモノグラム・マルチカラーは、歴史あるLouis Vuittonのイメージを鮮やかに一新させ、世界中で爆発的な人気を博しました。この歴史的な大成功により、その後も草間彌生をはじめとする多くのアーティストとのコラボレーションアイテムが、Louis Vuittonから発表されることとなります。これらはとても革新的なコラボレーションの新たな流れを作りましたが、実は素晴らしいアートコレクターであり、モードの帝王と呼ばれたイブ・サンローランが既に、60年代にアートをファッションに取り入れた作品を発表していました。赤・青・黄の原色が組み合わさったパズルのような模様の「モンドリアンドレス」、サルバドール・ダリがデザインした「メイ・ウエストの唇ソファ」のようなシルエットが胸元についたドレス、ピカソやジョルジュ・ブラックなどのアート作品をオマージュしたオートクチュール・コレクションが存在します。イブ・サンローランの死後、オークション会社クリスティーズを通じグラン・パレで行われたオークションは、歴史的な結果となりました。出品された美術品は733点、落札額の総額は3億4,200万ユーロ（当時のレートで約429億円）。小さな国の国家予算にも匹敵するほどの金額で、個人所蔵品の競売としては過去最高額を記録したのです。

ストリートファッションやサブカルチャーが台頭していた90年代後半。雑誌では読み取ることのできないニューヨークのリアルな空気を、多感な時期に感じられたことは、その後の人生に大きな影響があったと思い

ます。また、深いコミュニケーションや、生活・文化について学ぶために、日常英会話の必要性を痛感しました。日本の音楽を現地で耳にしなかったことに対して、日本のブランドを身につけている人がいたことはとても印象的でした。音楽に比べ、ファッションやカルチャーには言葉の壁をあまり感じません。理解しやすいコンセプトやコンテキストの共通認識があれば、海外の人にも親しまれ、選ばれるモノだという感覚がありました。それらの経験が、この後アートにより興味を持つきっかけとなったと思います。

## #9 アート

外を歩いていると、至る所で遭遇するパブリックアートやミューラルアート。ニューヨークの街はアートによって活力や躍動感を感じます。バラエティー豊かなお店と相まって、街自体が大きなテーマパークのようです。高層ビルの多い、ニューヨークの街にこのようなアートがなければ、もっと殺伐とした空気になっていたでしょう。オフィスビル前のスペース、街角の広場など、色々なところに銅像やステンレス製の立体的なパブリックアートが、恒久的に備え付けられています。イサム・ノグチやキース・ヘリングのオブジェが、彼らの死後もなお、生き生きと街中に鎮座しているのを目にし、素晴らしい作品は永遠に生き続けることを実感しました。また、ビルの壁には故人を偲ぶための記念碑的な作品から、企業のプロモーション広告まで、様々なミューラルアートを見ることができます。90年代のイーストサイドを代表する人気ラッパーだった、ノトーリアス・B.I.G.など、人物を描いた壁画が多く見られました。そして、ペプシや丸井のロゴマーク(OIOI)を手がけたクリエイティブ・ディレクター、ピーター・アーネルによるDKNYの巨大壁画がソーホー地区の象徴となっていました。

夏の地下鉄構内は、風通りが悪く空気が淀み、所々で異臭がします。蛍光灯の明かりも少し暗く、当時はまだ少し不気味な雰囲気があり、日本の地下鉄とは大きく異なっていました。直線的な鉄骨で駅が組まれており、視界が遠くまで広がっていてトンネル感がありません。路線案内表示のシンプルなタイポグラフィと、各駅のプラットフォームにある美しいタイルモザイクで装飾された駅名標識は、映画でよく目にしたままで、まるで映画の世界に入り込んだかのように感じてワクワクしました。現在、ニューヨークの地下鉄構内には、様々な有名アーティストの作品を見ることができますが、90年代後半にそれらを見かけた記憶はありません。00年代に入ると徐々に駅構内にアート作品が増えていきました。ユニークな姿をしたトム・オターネスによるブロンズ像を数多く目にします。警官がお金の袋の上に立ち守っていたり、お金の袋を大切にそうに抱えベンチに座っている紳士がいたり、いずれもお金にまつわるもので、資本主義の中心ニューヨークらしい演出です。また、タイムズスクエア駅の構内には有名なポップアーティスト、ロイ・リキテンスタインによる「タイムズ・スクエア・ミューラル」があります。2023年にはグランドセントラル・マディソン駅がオープンし、通路に新しい壁画が誕生しました。1950年代にニューヨークに渡った偉大な日本人アーティスト、草間彌生による大作「愛のメッセージ、私の心から宇宙へ」です。太陽やカボチャなどが、カラフルなモザイクタイルで施されています。命の美しさや生きる喜びを感じる、草間さんらしいエネルギーに満ち溢れた作品です。

街中や地下鉄でも、たくさんのアートを無料で楽しむことができますが、ニューヨークの美術館やギャラリーでは日々、最高峰・最先端のアートの展覧会が開催されています。当時は高校生だったので、美術館にはある程度の馴染みや予備知識はあったものの、ギャラリーに関しては全くの無知でした。小学生の時に父に連れられて行ったヒロ・ヤマガタやクリスチャン・ラッセンの展示で、イルカのポスターを貰った記憶があるくらいです。祖母がいつもくれる招待券で行った松坂屋美術館は、ギャラリーではなく美術館になるのでしょうか？東山魁夷や平山郁夫など、日本画の展示が多かったような気がします。キース・ヘリングの展示が、当時の自分には一番楽しめた展示でした。あとは、パルコギャラリーでソフィア・コッポラがプロデュースした「Baby Generation」など、いくつかの展示を見た記憶があるくらいです。こういった百貨店や商業施設に併設された日本のギャラリーとは違い、ニューヨークで見たギャラリーは、とても洗練されているように感じました。現在では多くのギャラリーがチェルシー地区にありますが、買い付けで歩き回っているときは、少しですがソーホー地区でギャラリーを見かけました。人が全然いない、真っ白な壁のただっ広いスペースに絵やオブジェが飾ってあり、ニューヨークでは珍しく、清潔感ある不思議な空間でした。お客さんが大勢いる、アパレルショップやスニーカーショップよりも広く、結界やバリアが存在するような、張り詰めた空気を鮮烈に覚えています。その時は外から眺めるのが精一杯でした。

世界中から多くの旅行者を惹きつける都市には、素晴らしい美術館や博物館が存在します。ニューヨークには、他に類を見ない個性的で素晴らしい4つの美術館があります。古代メソポタミア文明から、中世ヨーロッパとイスラム美術、アジア美術まで世界最大級のコレクション数を誇るメトロポリタン美術館 (MET)。近現代美術のマスターピースから、写真やデザインの代表作まで、数多く揃っているニューヨーク近代美術館 (MoMA)。20世紀以降のアメリカ現代美術に特化したホイットニー美術館。著名建築家フランク・ロイド・ライトの設計による、白いカタツムリのような外観が特徴で、世界文化遺産にもなっているグッゲンハイム美術館。いずれの美術館も心地よいカフェやレストラン、中庭やルーフトップなどの休めるスペースが併設されていて、一日中アートを楽しむことができます。2018年にメトロポリタン美術館の入館料システムが、50年ぶりに変更され話題になりました。ニューヨーク州以外からの来館者に対し、入館料支払いが義務化され、旅行者は固定の入館料を支払って入館するようになりました。当時、メトロポリタン美術館への入館は、寄付金を支払う形でした。入館料としてふさわしい料金が入口に提示されおり、実際は寄付金ということで、1ドルでも入館できたのです。残念ながら現在、METとMoMAは入館無料日や任意料金の日はありません。MoMAはかつてユニクロがスポンサーとなったユニクロ・フリー・フライデー・ナイト (毎週金曜日の午後5時30分から9時まで) という入館無料日がありましたが、現在ではユニクロ・NYC・ナイト (毎月第1金曜日の午後4時から8時まで) と名前も変わり、ニューヨーク市民限定で無料で入館できるように変更されました。ホイットニー美術館 (金曜日の午後5時から10時までと第2日曜日)、グッゲンハイム美術館 (月曜日と土曜日の午後4時から5時半まで) は、任意の料金で入館できるPay As You Wish (ペイ・アズ・ユー・ウィッシュ) があり、その時間帯は長蛇の列ができています。

ありとあらゆる贅沢をし尽くし、ボランティア活動や慈善事業・寄付など通し社会貢献をしている多くのお金持ちが、最後にたどり着く先は優れたアートをコレクションすることかもしれません。子どものような純粋な線や色、多くの人を惹きつける激しいオーラをもつ作品を購入することで、埋まらない心の安心感を得ようとしている気がします。お金を出しても買えない何かが素晴らしい作品には存在します。しかし、そん

な作品も墓場までは持っていきません。コレクターから寄贈された素晴らしいコレクションがニューヨークの美術館で無料で見る機会があることに、自由と平等を感じました。楽しみ方に正解はなく、どんな環境に置かれた人でも楽しめるのが芸術。人間だからこそ楽しめるのが芸術。美術館ではお金持ちも貧乏人も関係なく素晴らしい作品を目にすることができることで、誰しものが芸術を楽しむことができ、もしかしたら人生を変えるきっかけになるかもしれません。ニューヨークはホームレスが多く格差を感じた一方で、街中にアートを備え付けたり、美術館を無料で開放することで、誰しものが人間らしい楽しみと人生を変えるチャンスがある街に感じました。

## #10 メトロポリタン美術館

「The Met」という愛称で親しまれているメトロポリタン美術館 (MET) は、1870年に開館しました。5000年以上にわたる歴史の中で、世界各国から集められた300万点を超える貴重な収蔵品は、世界美術史を生で体験できる世界随一の美術館です。まるで世界美術大全集に入り込んだような感覚を覚える、アート好きにとっては夢のような美術館です。近年ではファッションデザイナー、アレキサンダー・マックイーンの回顧展が記録的な来場者数を達成しました。毎春恒例の華やかなレッドカーペットやファッション展が、アカデミックでお堅い美術館のイメージを一変させました。毎年5月の第一月曜日に開催される、US版「VOGUE」の名物編集長アナ・ウィンター主催のメットガラでは、個性的なドレスで魅了するセレブリティたちの姿が世界中に拡散されて話題となります。完全招待制のチケットは数百万円、テーブルチャージは数千万円にもものぼるともいわれています。ガラの売り上げは、METの服飾研究所(コスチューム・インスティテュート)の活動資金として活用されるので、芸術文化としてファッションを庇護するための、重要なイベントでもあります。こうした活動から写真や建築と同様にファッションもまた、アートの1つのカテゴリとなりつつあります。

METは「多くの人に開かれた美術館」を目標にかかげ、1970年から2018年まで入館料が任意設定でした。近年ではインフレやコストの上昇に伴い、美術館の入館料の値上げも相次いでいます。2024年現在の入館料は、METとニューヨーク近代美術館(MoMA)は共に大人30ドル、学生17ドルとなっています。美術館の運営には、非常に多くの費用が掛かっていて、実際には入館料だけで賄うことはできていません。そのため、慈善家の寄付金に頼っています。しかし、これが美術館の公共性において大きな問題でもあります。寄付金は寄付者の意向に沿って使用する必要があるため、大金を寄付する特定の慈善家が美術館の運営に影響を持つこととなります。職員の給与や美術品の修繕など、美術館都合の目的で自由に使うことができません。美術館は慈善家の寄付金で慈善家のお気に入りの美術品を購入し、権威のある学者に研究・調査してもらいます。それにより、慈善家が所有している同じような美術品もまた、美術館が購入したものと同様の価値をもつことにもなるのです。もちろん意図していない人もいますが、意図的に資産価値の向上を目的に行われるケースもあるように感じます。とは言え、残念ながら慈善家なしでは美術館などの文化施設の運営が、成り立たない仕組みとなっています。では、今以上に高い入館料を払って、芸術文化を楽しむことが良いかと問われると、とてもイエスとは言えません。

90年代後半に初めてMETを訪れた時、入口で1ドルを支払い入館すると、クリップ式の丸いバッジがもらえました。そのバッジには、「M」の一文字をかたどった、美しいロゴが記されていました。METの収蔵品の1つである、数学者ルカ・バチオーリが、黄金比例と正多面体論を説いた「神聖比例論」の中で、レオナルド・ダヴィンチが挿絵として描いた、アルファベットMのレタリングをもとに、1971年に製作されたものです。美術史の物語性を感じる知性的で上品さが体現されていました。そのバッジを付けていると当日に限り、美術館の出入りが自由にでき、外で食事や休憩をしてまた戻ってくるのが可能です。あまりに広いので、1日ではゆっくりと見て回ることは難しいくらいです。世界中から集められた、美術品を見て回っていると、人類の歴史と共にアートの歴史があることを実感します。しかし、なぜ世界中の「お宝」が、ここニューヨークにこんなにも多く集まっているのでしょうか。決してアメリカ原産の「お宝」ではないのに不思議です。大好きだった映画シリーズ「インディ・ジョーンズ」で、ハリソン・フォード演じるジョーンズ博士が、ヒトラー率いるナチス・ドイツやソ連の軍隊を相手に、古代文明の「お宝」を奪い合っていたことを、ふと思い出しました。真実を知る由もありませんが、現実起こった出来事は、虚構である映画より摩訶不思議であったと思います。

しばらく広い館内を散策して辿りついたのが、アジア美術のセクション。他と明らかに違うものは仏像です。国は違えどアジアは仏教が栄えていたことがよく分かります。そして、他のセクションと共通するところは金です。国や地域、宗教を問わず、金は太古の昔から今日まで人々を魅了し、争いの引き金となり、権力の象徴となってきました。5番街で見た、金ピカのトランプタワーの外観もさることながら、ニューヨークではたくさんの金が、宝飾店のディスプレイを埋めています。かつて「黄金の国ジパング」と呼ばれた日本には、大仏像や金屏風など、荘厳華麗な美術品がありました。今の日本で金をあまり見ないことには、意図的な何かを感じます。また、記憶に残っている日本美術は、狩野派や琳派の屏風絵と、葛飾北斎や写楽の浮世絵と、ジョージ・ナカシマの家具くらいです。日本人画家の作品が全くなく、世界美術史的には、日本美術があまりにも認知されていない現実を目の当たりにし、高校生ながらショックを受けました。中学生の時、大好きだった美術の教科書で見た、ゴッホやルノワールはたくさんあるのに、同じ教科書に載っていた高橋由一や岸田劉生、松本俊介などの日本人による絵画は1枚も見当たりません。同じ日本人として、とても虚しい気持ちでした。西洋美術史から見た日本のアートは江戸後期で止まっているようにも感じました。一般的な細巻きや太巻きとは違い、外側に寿司飯、内側に海苔という巻き方のカリフォルニアロールが日本人からしたら違和感を感じるように、西洋人から見た明治以降の近代化された西洋っぽい日本の芸術は違和感があるのではないかとその時に気づきました。長い歴史のある日本美術が、正しい認識でMETのコレクションに入れば、日本のアートも他の地域のアートと同様に世界美術史に刻まれます。日本人の素晴らしい美意識を世界中の人に伝え、私たちの文化を正しく後世に残していく必要性を感じました。しかし、その当時の私は日本の美術大学に行っても、METにコレクションされるような人物になるのは難しいのではないかと疑問を持ち始めていました。このような経験が今後、高校生であった自分の進路に大きな影響を与えるのでした。

90年代、海外買い付けの定番といえばファクトリーアウトレットでした。「アバクロ」や「バナリパ」の通称で知られていた、アバクロンビー&フィッチやバナナ・リパブリックなど、当時まだ日本に上陸していなかったカジュアル・ラグジュアリーブランドを中心に、ナイキのスニーカーやラルフ・ローレンのシャツなどを安く仕入れるためです。ニューヨークにも、郊外に行けばアウトレットがあります。ミッドタウンにある、ペンステーション近くのポートオーソリティから、1時間少々バスに揺られると、東海岸最大級の「ウッドベリー・コモン・プレミアム・アウトレット」に到着します。映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」に出てくるような、白い木製の平屋建て、または2階建てのキレイな店舗が並ぶ、アメリカっぽいクラシックな街並みです。お店の多さと広さに驚きながら、店内マップを見つつ、足早に目的のお店を回りました。スニーカーなどの靴類は日本と同じサイズ規格ですが、アメリカのアパレルサイズ規格は日本とは異なり、同じサイズ表記でもオーバーサイズになることが多いです。また、サイズ展開はXSからXXLくらいまで、幅広く揃っています。色の展開も日本で販売している商品よりも多く、品数豊富です。

今では、当たり前になっているアウトレットですが、90年代にはまだ数店舗しか日本になく、行ったことがありませんでした。アウトレットモール発祥の地、アメリカで初めてアウトレットへ行くことができました。個人的な趣味嗜好で、好きなものを予算内で買う「買い物」と、お客さんのニーズを察知し、トレンドや世の中の動きを把握して予算内で仕入れる「買い付け」は全く違います。買い物の楽しさというよりも、サイズや色を見て、日本で需要のありそうな商品を買付けすることの大変さを実感しました。広いアウトレットを時間の許す限り、へとへとになりながら、お店をくまなく回っていきます。シーズン商品の不良在庫やサンプル品など、通常ルートで売れないものもあれば、B級品でシミがあったり、ボタンがなかったりする商品を格安で販売しています。そのため、商品の状態を必ず確認する必要があります。当たり前ですが、日本に帰ったら返品・交換は一切できません。また、在庫処分する為ではなく、アウトレット用に作られた商品もあります。そのような商品は、クオリティが悪くなかったり、価格設定がもともと安かったり、買い付け商品としてあまり魅力的ではありません。今まで客として買い物をすることしかありませんでしたが、初めてお店側としてモノを仕入れる視点を得ることができました。それにより、お店側の視点で物事を捉えることで、商品自体の価格について敏感になりました。アメリカのアウトレットでの価格と、日本の輸入雑貨屋での販売価格にはとても大きな差があります。その差が利益となり、そこから旅費などの経費を差し引いた純利益により商売となるかが決まります。純利益を出すためには、見えない苦勞があり、またたくさんの努力が必要なことを学びました。これらの経験は普段の何気なく買っているモノの「価値」や「売価」のことを真剣に考えるととても良いきっかけとなりました。

「エアマックス95」は名前のとおり、ナイキが1995年に発売したソールにNike Airが搭載された、エアマックスシリーズの人気モデルです。「イエローグラデ」と呼ばれるカラーリングを中心に、日本で一大ブームを巻き起こしました。エアマックス95を履いた人を狙った襲撃事件がたびたび起きたことから、「エアマックス狩り」という言葉が生まれるほどの社会現象となりました。一方のアメリカでは、日本のようにエアマックス95が爆発的に人気だったわけではありません。当時の人気モデルだった、エアフォース1の倍ほどの140ドルもすることもあり、ニューヨークでも履いている人をあまり見かけませんでした。1番はじめに発売された、黄色のカラーリング以外のものは、いくつかマンハッタンのお店で購入することができました。しか

し、なかなか「イエローグラデ」を見つけることができません。アウトレットでナイキのお店を見て回っている時、ふと店員さんの足元を見るとそこにはあの「イエローグラデ」があり、思わず駆け寄ってしまいました。一緒に行った輸入雑貨屋のオーナーがその店員さんと交渉をし、私物の「イエローグラデ」を購入しました。いくら日本から来て探していたといえ、人が履いているスニーカーをその場で購入してしまうとは想像もしていませんでした。しかし、そのくらいの情熱と行動力がないと出来ない仕事なんだと改めて思いました。そのまま靴下で仕事をしている店員さんに少し申し訳ない気持ちになりつつも、今まで経験したことの無い忘れられない思い出となりました。その「イエローグラデ」は、彼の息子さんへのお土産となったそうです。

ここアウトレットでもそうですが、この旅ではあまり食事に時間を使った記憶はありません。買い物の合間にフードコートでささっとすませる感じで、何を食べたかは覚えていません。おそらく何かファーストフードだったと思います。ファーストフードのイメージは、アメリカに行って、印象が大きく変わりました。日本のように店員さんが「笑顔でサービス」なんてことは一切なく、基本的に無愛想で、時には不機嫌そうに仕事しているように感じました。決まった時間で店内のトイレの清掃をしていたり、テーブルをキレイに拭いていたりする姿など、もちろん見かけませんでした。しかたありませんが、ファーストフード店の雰囲気はあまり良いものではなく、食事というより、動くためにカロリーの高いものを補給している感じで、ガソリンスタンドみたいです。また、ニューヨークではいたるところにフードコートが出ています。美術館前など観光スポットでは値段が高いですが、場所によってはホットドッグが1ドルで食べられたり、ピザのお店もたくさんあり2ドルくらいで大きなスライスピザを食べることができました。最初はアメリカらしい食事にテンションが上がり美味しく食べてましたが、だんだん飽きてしまい、食事をしているという感覚が薄れてきます。そのため、毎日、当たり前のように母が料理をしてくれたり、お弁当を作って持たせてくれるありがたさを心底感じました。いつも気分が上がるわけではないものの、飽きることなく美味しくいただくことができました。お米やお野菜、お魚やお肉にしても実際の姿や形が容易に想像できるのも日本の食事の特徴かもしれません。食事の際、手を合わせて感謝する意味が理解できました。生きるために、他の命を奪っていただいていることに対する感謝の気持ちだと思います。日本の食文化には、見栄えのする美しい盛付、相手を思いやるおもてなしの心、薄味ながら味わいを引き立たせる料理の技などの優れた特色があります。また、栄養バランスに優れた健康的な食として、世界でも関心が高まっています。日々の何気ない幸せは薄味の日本食のようなものかも知れません。1つ1つの所作に気を配り、毎日を丁寧に生きることを心がけたいものです。

## #12 デンバー

今回の旅、2つ目の目的地はコロラド州デンバー。ニューヨークから飛行機で4時間半かけて降り立った街は、大都会ニューヨークとは異なり、穏やかな空気を感じました。乾燥した爽やかな空気と、これぞスカイブルーという文字通りの真っ青な空。真夏の明るい太陽の光が、気持ち良く降り注ぎます。街中を路面電車が走り、都会の喧騒とはまた違ったゆっくりとした時間が、デンバーの街には流れていました。自然探索が

目的ではなかったのですが、国立公園やロッキー山脈周辺へ、ハイキングとはいきませんでした。街中を散策しているだけでも、十分に心地良い時間を過ごすことができました。そして、ここデンバーで初めて本家アメリカのコンビニ「セブンイレブン」を体験しました。レジ横にある日本では見たことのない機械の上を、数種類のソーセージがコロコロと楽しそうに回っています。自分で気に入ったソーセージを1つ取り出し、近くの引き出しに並んでいるロールパンに挟み、ケチャップ、マスタード、レリッシュ、チーズなどをトッピングするスタイルです。また、ホットスナックのケースにホールで並んでいる大きなピザや、色鮮やかなドーナツも印象的でした。セルフサービスのドリンクサイズも驚きのバケツサイズがあり、ペプシやマウンテンデューを好きなだけ飲める、夢（悪夢？）のようなドリンクマシンを目にし、アメリカが「夢に溢れた国」であると同時に、「自己責任の国」であるをつくづく思いました。

デンバーで宿泊した、全室スイート仕様のホテル「エンバシースイーツ」は、ニューヨークで滞在したホテルよりもリーズナブルで、とても快適でした。寝室とリビングルームが別々になった、広々とした間取りの客室は、エアコンの音も静かで、大きく快適な分厚いマットレスのベッドで、ゆっくり休むことができました。中庭には屋外プールがあり、少しですが、バカンス的な雰囲気のホテルで楽しむことができました。普段の家族旅行で泊まる日本式の宿やホテルとは違い、重厚感のある家具や広々としたスペースに、アメリカの豊かさを感じました。不慣れなフォークとナイフで食べるベーコン、スクランブルエッグとパンのアメリカンな朝食。また、日本とは仕様が異なるトイレ・バスルームでの慣れないシャワーカーテンの使い方や、ベルボーイやベッドメイキングに対するチップの支払い方など、日本では体験できないことを色々と学びました。日本では、マクドナルドなどのチェーン店の商品価格や、自動販売機の飲料価格は同じでしたが、アメリカでは、街や場所によって、モノやサービスの価格が大きく異なることを知りました。

ここデンバーでの目的は、郊外のスリフトストアでの買い付けでした。スリフトストアとは、古着をはじめ、中古の家具や食器、古本から電化製品まで幅広く扱っているリサイクルショップです。非営利団体が運営している大きなガレージセールのようなお店で、寄付されたモノを格安で販売しています。一般的に不用品を扱うお店なので、商品がキレイに陳列されていません。日本で例えるならバザーやフリーマーケットのようなものです。釣竿やキャンプ用品から古いスーツケース、Tシャツなどの衣類、バンダナなど様々なモノが並んでいて、まずモノの量に驚きます。大量生産・大量消費社会である以上、日々、世の中にモノは増え続けます。ファッションが好きな年頃だったので、大量の古着の中から、GAPやラルフローレンなどのブランドのシャツを掘り出すのは楽しかったものの、どこか心に疑問が生じることもあり、自分の中の何かが変わっていく感覚がありました。まだ90年代にはファストファッションという言葉はありませんでした。ですが、機械の技術や合成繊維が発達していく中で、低品質、低価格の衣料品がどんどん大量生産されるようになってきます。ヴィンテージの古着が好きだった私には、スリフトストアで見たそのような大量の衣料品がどこか魂の抜け殻に感じました。そんな中からまだ魂が残る服を助け出す作業のような気がしました。大量生産・大量消費社会の中で埋もれてゆく、古き良き「アメリカの魂」が、日本に運ばれてくる裏側を見ることができました。

旅の最後を締めくくる話は、パッキングについてです。ニューヨークでは、買い付けた商品を現地で調達した段ボールに詰めてUSPS（郵便局）から、いくつか日本へ送りました。一方、デンバーのスリフトストアで

購入した大量の商品は、アメリカの現地スタッフが、コンテナ輸送の手続きをしてくれました。あとは手荷物として持ち帰る商品を、スーツケースとナイロン性の大きなバッグに分けて、詰めていきます。スニーカーなどの箱は丁寧に折りたたみ、スーツケースにしまえます。壊れ物や貴重品は、手荷物で飛行機に持ち込めるよう丁寧に梱包します。衣類は圧縮バッグに詰め小さくしてから、ナイロンバッグに押し込んでいきます。ニューヨークからの移動日、そしてデンバーでの最終日は夜通しこの作業に追われました。体力、気力のいる作業が続きます。決して楽な仕事ではありません。思い出に浸る余裕もない慌ただしい最終日です。帰りの飛行機では、初めての海外で1週間ほど歩き回り、最後の最後まで詰め込み作業をやり切った充実感と体の疲れから泥のように眠っていました。いつもお店で目にしてきた商品が、このような過程を経て日本に輸入され、お客さんの手に渡っていくと思うと、感慨もひとしおです。買い付けの仕事は、商品を右から左へ流すような簡単な話ではなく、お店のオーナーやバイヤーの思い入れがなくては、なかなかできないと知りました。そう、好きじゃないとできません。

現在ではSNSやインターネットで簡単に海外の情報を得ることができます。そして、VRの中ではあたかもそこへ旅行に行った気分にもなれます。ですが、匂いや音、その場の空気感といった人間の五感によって受ける身体的刺激は、現地を訪れなければ得ることのできない感覚です。いわゆる体験というものです。それは、現地で自然や人と触れ合うことによってのみ、深く知り感じることができます。また、日本とは異なった自然環境や文化・習慣を理解することで、多様性や寛容性を学ぶことにも繋がっていきます。もちろん全てが楽しい訳ではありません。駅にトイレがなかったり、時間通りに電車やバス、待ち合わせた人が来なかったり、街中にゴミや汚物が散乱していたりと不自由や不快を感じることもあります。しかし、その物事のポジティブとネガティブの両側面を経験することによって自分のコンフォートゾーンから出ることや、人としての幅を少しずつ広げていけると思います。旅は夢や目標を見つけることに繋がり、毎日を充実させる近道かも知れません。この1週間ほどのアメリカ旅行が16歳の私の心を大きく成長させてくれました。

多感な高校時代を振り返り、改めて感じたのは、出会いの重要性です。憧れの人や学びを与えてくれる人のすぐそばで、時を共に過ごすことが自分の理想に近づく近道だと思います。自分の知識や経験を惜しみなく語り、また高校生の自分の意思だけでは見れなかった大人の世界を見せてくれた2人、「焼き鳥屋の大将」と「雑貨屋のオーナー」に今でも心から感謝をしています。高校生の時、通学電車の中で見た元気のない、虚な目をした多くの大人ではなく、キラキラした目で夢や楽しいことを語ってくれた2人のような大人になりたいと思うことができました。私も彼らのように、楽しそうな大人でいたいと思います。